|  |
| --- |
| 東洋大学「井上円了が志したものとは」作品応募 |
| 一般の部（一般社会人） |
| タイトル「気張らず威張らず」 |
|  |
|  |
| 小林篤来 |
| 東京都新宿区高田馬場4-29-39☎ 03-5386-5086📱 090-9685-1093 |

本文文字数は、タイトルを除き1,934文字。

|  |
| --- |
|  |

以下のとおり、作品を提出いたします。

宜しくご査収のほどお願い申し上げます。

気張らず威張らず

洋装に身を包み畳にあぐらをかいて座る井上円了。いい写真だ。

四十代後半だという。彼の上体は右にかたむき、リラックスしているのが分かる。身体のどこにも力が入っていない。微笑みを浮かべた口もとはわずかに開き、彼の声が聞こえてきそうだ。

円了の四十代後半は、人生の転機であった。中野哲学堂での退隠の生活がはじまった。体調はすぐれず、健康に対する不安もあったであろう。

退隠の生活とは言え、彼の素志である哲学教育による人材育成は、ここに至ってさらに一歩前進した。彼の眼は、庶民に向けられた。彼を突き動かす原動力は、大乗的な倫理性と言えるであろう。彼の多年にわたる教育活動が種子となって阿頼耶識に植え付けられ、それが年月を経て庶民への哲学教育という明確な行動目標に実を結んだかのようである。

円了が目指した庶民への哲学教育のその核心部分は、庶民の知性の向上と言ってよいであろう。彼は「修身道徳」の改良と言うが、この意味は、現代の言葉になおせば、知性の向上と理解すべきである。人間の知性の向上こそが、その人たちが暮らす社会の安定と繁栄をもたらし、ひいては国の独立を確かなものにする。この信念に突き動かされての講演活動であった。

円了の後半生での講演回数は、五千四百回に達するという。活動主義哲学を標榜する円了の面目躍如たるものがある。彼は、中国・大連での講演中に倒れて不帰の人になったという。まさに、活動主義哲学に殉じた死であった。

このような円了の講演活動は、生半可な意思でできるものではない。「奮闘は天の命なり」との彼の言葉にもあるように、奮闘の精神がなければできるものではないだろう。しかしながら、それだけだったのだろうかとも思う。

青年円了は、真理を求めて西洋哲学を学んだ。そのうえで、仏教哲学の先見性に気づくことになる。しかし、彼の尊敬すべき点は、西洋哲学を排除しない姿勢である。排除しないどころか、西洋哲学の先哲を最大の敬意をもって遇している。これは、仏教の包容力というものであろう。人間の心の最奥部を見てみれば、そこには全世界の現象が包摂されているという。仏教哲学が解き明かしたところの人間の心は、まさに受容する心である。

このような受容する心は、やわらかな広い心である。気張るということを知らない心なのであろう。このような心があったればこそ、五千四百回もの講演をこなすことができたのではないだろうか。そのように思えてならない。

受容する心、気張らない心は、円了の言葉にも表れている。彼は、苦なら苦に徹すればそこに楽ありと言う。「苦なら苦に徹する」とは、苦を苦として受容するということである。この境地に達するには、気張らない心がしっかりと根付いていなければ到底できないことであろう。

彼の著した『台湾紀行』からは、そのような心があったことを感じとれる。貴学公開講座「井上円了の見た世界」2019年6月15日付け野間信幸教授の配布資料によれば、円了は夜の山道を風雨の中駕籠に乗って次の講演地に向かったという。台湾とは言え二月のことであり、寒さを感じたと書いている。ところが彼は、「是れ又旅中の一興にして、頗る勇壮を覚ゆ」となんだか楽しげな筆致で感想を述べている。苦しさに気張った心で耐えるのではなく、気張らない心で苦を苦として受容していることが分かる。

このような円了の人となりからは、威張らない心も見えてくる。

全国巡講で山奥の田舎に行ったときのことである。円了は、講演会場の小学校の教室でテーブルを並べてその上に寝たこともあり、食事に不足がましいことを言うでもなく、村長、校長らとすすんで並座して「村酎」を共にしたとのことである。越後言葉で談笑する円了の姿が浮かんでくる。ここに描写された円了からは、威張る心など微塵も感じられない。

ここでまた私は、あの写真に目をやった。気張らない円了、威張らない円了が見えてくる。

ひるがえって現代社会に暮らす私たちに思いをはせると、グローバリゼーションの進展を背景に価値観の多様化が進む現在、私たちは真の意味での知性の発露が求められている。私たちの心は、ややもすると排除の論理に傾斜していきかねない。差別の心が芽生えかねない。差異を差異として認めてこそ私たちの社会は、より心豊かなものになるはずだ。そのためには、受容する心が求められる。

この受容する心を日常生活の中で実践するには、社会に暮らす一人一人が気張らないこと、威張らないことを心がけることではないだろうか。

私は、円了享年の歳を五歳ほど上回っている。家族にめぐまれ、良友にめぐまれ、楽しく日々を送っている。これからの人生を気張らず威張らず生きていけば、わが人生もさらに心豊かなものなるであろうと信じている。

以上／小林篤来